

ハノイ日本人学校帰国報告

2008年度～2009年度 ハノイ日本人学校派遣教員
現；日高町立厚賀中学校 教諭 青谷正人

【はじめに】

私が、日本人学校への派遣を希望した理由は、自らがロンドン日本人学校中学部第7期卒業生であること、また、現地校での生活経験があることにある。

この度は、多くの方々の後押しいただき、教員としての立場でハノイ日本人学校で勤務できたことを感謝しつつ、これから在外教育施設にて研修を深め、様々な事情によって国外生活している子どもたちのために、ご尽力されることであろう先生方の為に、帰国報告を記させていただく。

【1】ベトナム社会主義共和国の概要

暗いイメージをお持ちの方もいらっしゃるかと思うが、現在のベトナムは活気に満ち、NEXT11（BRICs に次ぐ急成長が期待されるとした 11 の新興経済発展国家群。具体的にはイラン、インドネシア、エジプト、韓国、トルコ、ナイジェリア、パキスタン、バングラデシュ、フィリピン、ベトナム、メキシコ）に数えられる経済的に注目を集めている国である。その為、日本企業の進出も多く、日本人学校設置の重要性が高いのである。

<正式名>

ベトナム社会主義共和国（Socialist Republic of Viet Nam）

<面積>

32万9241km²（日本の約0.9倍）

<人口>

約8580万人（2009年現在、日本の約0.8倍）

<人口増加率>

1.2%（過去10年平均）

<首都>

ハノイ（Hanoi）

<政体>

社会主義共和制（国家主席・首相・書記長によるいわゆる「トロイカ体制」）

<国家主席>

グエン・ミン・チエット(Nguyen Minh Triet)

<共産党書記長>

ノン・ドゥック・マイン(Nong Duc Manh)

<首相>

グエン・タン・ズン(Nguyen Tan Dung)

<民族構成>

キン族（ベト族）が約90%。そのほかに54以上の少数民族が存在。

<宗教>

仏教約80%、キリスト教9%、イスラム教、カオダイ教、ホアハオ教、ヒンドゥー



一教など。

<言語>

ベトナム語。文字はクオック・グー (Quoc Ngu) という、変形アルファベット標記文字を使用する。外国人や旅行者を相手にする所では英語が通じることもある。店によっては日本語が通じることもある。また年配者にはフランス語やロシア語が通じることもある。英語の普及率は、都市部では高いが、田舎、農村部では、かなり低くなまりも強い。

<ベトナムの通貨>

通貨の単位はドン (Dong=VND (ベトナムドン))。使用されているのは、紙幣が 100、200、500、1000、2000、5000、1 万、2 万、5 万 (2 種類あり)、10 万 (2 種類あり)、20 万ドン、50 万ドンの 13 種類、硬貨が 200、500、1000、2000、5000 ドンの 5 種類。ただし、商品購入の際、500 ドン以下の小額紙幣や硬貨はおつりとして切り捨てられたりボールペンやあめ玉などで代替されることもある。また、US ドルの使用は法律上は違法行為であるが、一般に流通している。しかし、偽ドル札も流通しており注意が必要である。全ての紙幣に共通して、多少でも千切れていると受け取りを拒否されることがある。ちなみに、新札と呼ばれる紙幣はオーストラリアで発券 (印刷) されている。

<気候>

- ・ベトナム南部 (熱帯モンスーン地帯) … 乾季と雨季があり、年間を通して暑い。
- ・ベトナム北部 (亜熱帯)
… 多雨の時期と小雨時期がある。夏と冬の気温差が大きい。夏は高温多湿。冬は 10℃前後にまでに下がることもあり、現地校では休校措置をとっていた。

【2】ベトナム社会主義共和国の現地教育概要

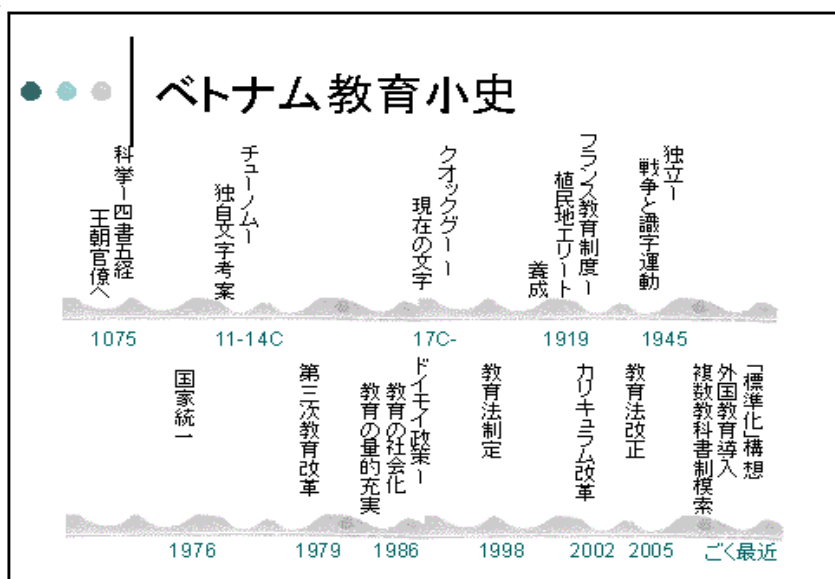
在外派遣教員の任務の一つが現地教育事情調査である。派遣当時、現地理解教育担当であったこともあり、(財)国際開発センターの津久井純氏 (2004 年から 3 年間、ベトナムで JICA の小学校教員研修プロジェクトを実施) にお願ひして「ベトナム教育制度ならびにカリキュラム講義」をしていただいた。

1. ベトナム教育小史

四書五経の時代にまでさかのぼることができる長い歴史を誇るベトナム (越南) であるが、独立戦争、ベトナム戦争などを経て、現在の教育制度になったのはつい最近である。

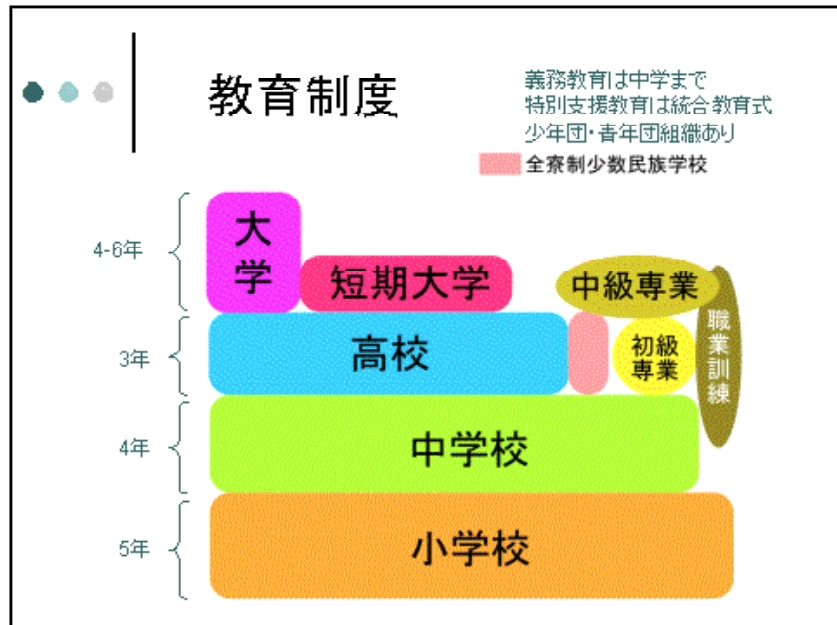
ドイモイ政策の成功と経済成長に合わせて、より高い教育を受けることが社会的成功への近道であると若者たちは認識し、向学心が強い。

特に、外国語の習得は直接、高収入につながるため、休日や放課後も語学学校へ通う児童・生徒がハノイでは多い。



2. 教育制度

図のようにベトナムでの教育制度は積み上がっている。義務教育は中学校までであるが、多くの私立小学校、私立中学校もハノイ市内にある。授業は多くの学校で、午前と午後に分かれ、児童・生徒はいずれかに通っている。授業前や放課後については、家業の手伝いや塾に通うなどそれぞれの経済事情によって過ごし方が違う。



3. 教科内容の特徴

表は、小学校での教科内容の特徴をまとめた表である。中学校の場合には、ベトナム語（国語）以外に外国語（英語・仏語・露語など）が入ってくる。また、第二外国語の授業もある。一部では、日本語を外国語の時間として学習している中学校もある。私が見学した私立ロモノソフ中学校では、特に、外国語に力を入れていた。

教科内容の特徴

ベトナム語	中心教科。さらに綴り、音読、文法・語句、Story telling(音読とは別の)サブ教科に分けて教えている
算数	中心教科。「新しい内容」と「ドリル学習」の時間に分かれる
道徳	道徳の教科書もあるが、すべての教科のすべての時間に道徳的な目標があり、常に行われている。
自然と社会	3年生で太陽系、公転・自転を扱うなど、高度な内容が多い。4年生からは地理/社会科学の科目名になる。歴史は唯一の解釈による国史である。社会史は少なく英雄史が多い。理科では日本等で見られる「観察」がほとんど行われない。
体育	兵式体操が多い。新しく創設されたばかりであり、教師自身が受けたことがなく、授業に消極的である。
図画工作	「模倣」が多い。模倣ではあるが、やはり観察は奨励されない。
音楽・英語	専科の先生が教えている。


教育の特徴としては「理論」「形式」を重視し、実践が少ない傾向にある。知識偏重であり、体験的な学習はほとんど見られない。具体的には、理科の授業においての実験は行われず、どのような変化が見られるかをおぼえることに重点が置かれているのである。その為、技能教科はもとより中心教科以外は時数も抑えられている傾向である。

また、授業態度についても「形式」が重視され、机の上にもどのように手を置くべきなのか、挙手の仕方や答え方も決まっている。これは児童・生徒だけに限らず、教師にも同様に見られる特徴である。

4. 成績や進級

● ● ●

成績・進級



- 小中での進級・卒業試験廃止
- 小学校の成績: 期末テスト(年2回)結果と普段の学習状況から
- 評価方法: ベトナム語と算数は点数
その他教科はA+, A, B+, Bなど4段階
- 小中を修了する際: カリキュラム履修証
- 「連絡帳」を通じて教師と父兄の間で子どもの学習結果が共有される。

数年前までは、小中でも進級試験や卒業試験が行われていたが、近年、見直され、総合的に判断されるようになった。


教育制度が確立されてから未だ十数年という状況のため、子どもたちは両親よりも高い学歴を将来得ることができる。このこともあり、保護者の教育に対する関心は高く、また、子どもたちも高学歴＝高収入という考えから非常に熱心に学習している。


具体的な数値は分からなかったが、大学進学率は高まっており、多くの私立大学も設立されている。

5. 教員の生活

● ● ●

教員の生活





家事等 登校・始業 1時間目 2時間目 業間休み 3時間目 4時間目 昼休み・帰宅・宿直 指導案・記録作成 登校 5時間目 6時間目 業間休み 7時間目 終業 家事 アルバイト 指導案・記録作成

7:00 7:15 8:15 8:25 9:25 10:00 10:00 10:15 11:15 12:15 12:20 8:00

授業は30分後ろにずれます

- 小学校は90%以上の教員が女性
- 全日制への移行、週2回の教材研究の時間
- 担任制度と専科制度
- 会議は少ない
- アルバイト(業務内・外)

図のように特徴的なのは、業務内外でアルバイトが認められている事である。中心教科（ベトナム語、算数・数学、外国語）では、終業後、塾講師をして高収入を得ている教員、いわゆるカリスマ教師もいるとのことである。

教員の給与は低く、家族を養うなど生活するには不十分だからとの事である。具体的な数字については、ここに記すことができない。実際、ウェイトレスのバイトをしている公立小学校教員から聞いたのであるが、公立学校教員の給与は驚くほど低かった。

6. その他

街中や学校で見かける小学生の多くは、赤いスカーフを首に巻いている。ちょうどネクタイのような感じの薄手のスカーフである。これは、学校制度とは別に実施されている少年団組織（【2】2. 教育制度図参照）の印である。

団員としての試験に合格した者だけが、赤いスカーフを授与され首に巻くことができる。自他共に見た目からもわかり、競争意識をあおるしくみである。

教員制度にしても優秀教員コンテストがあり、様々な面で競争原理が働いている事が分かる。日系企業で働くベトナム人にも同じ事が言えるようで、より待遇面で自分を認めてくれる職場へと転職していくそうである。

【3】ハノイ日本人学校の概要

児童・生徒ならびに職員の出入りも激しく、最新の情報についてはハノイ日本人学校 Web-Site (<http://www.jshanoi.com>) をご覧いただくのが一番であるので、ここでは、ごく簡単に記したい。

1. 沿革

平成6年に補習校としてスタートし、平成8年に日本人学校として開校した。初代校長は北海道より派遣された佐々木新次郎校長である。当初10名以下であった児童・生徒数も平成20年度には250名前後まで増加したが、リーマンショック、新型インフルエンザの流行にともない平成21年度には横ばいへと転じた。それまでは、数年間、毎年度約50名ずつ児童・生徒数が増加し、教室不足に悩まされ現校舎の建築に至っていたこともあり、今後の景気変動により、これからも様々な対策を準備しなければならない。

2. ハノイ日本人学校の特徴

①教育課程

ハノイ日本人学校は、小学部と中学部で構成され、同じ校舎を共有している。各教科・道徳・特別活動においては、日本の標準時数を上回る時数を確保し、国内と同程度以上の授業実践を行っている。また、在外教育施設には珍しく、一部、特別支援教育も実施しており、保護者と学校の同意のもとに障がい児も受け入れている。



小学部の特徴としては、一部の教科において教科担任制を取り入れていること、ネイティブスピーカーによる現地語（ベトナム語）教育や英語教育を低学年から取り入れている事にある。また、副読本（「シンチャオハノイ」）を作成し、授業実践に活用もしている。中学部については、通常の英語教育に加えてネイティブスピーカーによる英会話の授業、在外高等教育施設より講師を招いて高校説明会などが実施されている。また、中学部では教育活動外として希望者には夏季講習会も実施している。

小中共通として、現地校との交流事業、現地文化理解体験、亜熱帯の気候を活かした水泳授業など、ハノイだからこその授業実践が行われている。また、ハノイタイムという時間を設けて、漢字検定と数学検定に挑戦する事を義務化しているほかに、希望者には英語検定の受検機会も設けている。



ロモノソフ中学校との交流会

②学校施設

平成 18 年より旧校舎から現校舎に移転し、旧校舎を知る最後の生徒も平成 21 年度に卒業した。プール・グラウンド・音楽室・技美術室・理科室・家庭科室・図書室・PC 室など、小中で共有している。グラウンドには全面芝が植えられており、休み時間は子どもたちの歓声で湧いている。

また、後述するが進路資料室を設置し、本帰国に向けた編入・進学準備ができるよう各都道府県だけでなく在外高等教育施設の資料も含めて取りそろえている。

③各種行事

ハノイの気候は 1 学期にあたる 5 月～7 月が最も暑い。その為、運動会や学校祭（SF＝スクールフェスティバル）は 2 学期に行われている。小 6 と中 2 の修学旅行は 1 学期に実施され、毎年、ホーチミンへ行っている。

現地理解教育の一環として、現地校との交流事業は全ての学年で実施されており、その他に発達段階にあわせて社会見学にも行っている。

これとは別に、特別なお客様がいらっしゃったときには特別集會が設けられることもある。（例；皇太子殿下、全日本女子バレーボールチームなど）

【4】ベトナム(ハノイ)での生活

ハノイでの生活は、在住生活と仕事生活の 2 つに分けることができる。その中でも、仕事生活については 2 年間の赴任期間中に進学指導を中心に最も力を注いだ。その内容については、文科省へ提出した最終報告書をここに転載したい。

なお、在住生活については、赴任予定の方については「赴任の手引」がハノイ日本人学校より送付されるので、そちらを参照していただくと言うことで割愛する。

<調査・研究の目的>

中学部第3学年担任として、また、進路指導主事として進学指導に関わりハノイ日本人学校としての課題や本校卒業生を取り巻く進学先に関わる調査を行い、今後の日本人学校における進路指導業務について研究を行いたい。特に、学校説明では分からない部分について、現地を訪問し調査・研究をした内容をまとめていきたい。

中学部進路指導主事としての経験を活かし「進路資料室」開設・運営を平成21年度から始めることとなった。慢性的な資料不足である日本人学校にて、恒常的な資料収集ならびに保護者・生徒への提示方法を、また、平成21年度新設された進路資料室ならび平成21年度より発行される『進路便り』とあわせて、今後の日本人学校における進路指導業務について研究を行いたい。

<調査・研究計画>

1年次(平成20年度)

日本国外における進路先について、東南アジア唯一の高等学校進学先である「早稲田渋谷シンガポール校」への訪問を行い、調査・研究を行う。

2年次(平成21年度)

進路資料室のあり方、および、3年間を見通した日本人学校進路指導のあり方の調査・研究を行う。

1. はじめに

日本国外における進路先について、東南アジア唯一の高等学校進学先である「早稲田渋谷シンガポール校」への訪問を行った。

ハノイ日本人学校からは、平成21年1月現在、第1～3学年に1名ずつ早稲田渋谷シンガポール校に進学しており今年度も既に入学が決定している生徒もいる。毎年、高校説明会を本校において実施しているほか、平成21年度よりベトナム会場として、入試会場をホーチミン日本人学校とハノイ日本人学校で交互に実施することになった。

平成20年度の研究対象として、上記高校を訪問しレポートとしてまとめることは、これからの進路指導に大いに役立つと考え調査・研究対象とした。

日本人学校中学部における上級学校への進学指導に関わって最大の問題点である資料不足の状況ならびに見通しを持った進路指導のあり方について、平成21年度より新設される進路資料室経営と進路便りの発行を通じて、その問題点や今後の課題を明確にしていくことを調査・実験・研究対象とした。2年間の調査・実験・研究の報告を以下にする。

2. 身近な在外高等学校・早稲田渋谷シンガポール校

海外赴任期間が長くなっている企業が多い中、中学生の進学先に「寮」という条件がつくことも増えてきている。子どもたちの海外生活が長く、日本国内での生活に馴染むまでの困難を考えると日本国内へ進学させ親元から離れなくてはならないのは心配であろう。その点、海外での経験を継続して成長させつつ、日本の大学への進学準備を行うことができるこのような教育施設は大変ありがたい。

現在、英国立教、トゥーレ甲府、ニューヨーク慶応など、欧米地区には何校も在外高等教育施設があるが、アジア地区においては1校だけであり、訪問することによって口頭での説明のみよりも数段理解することができた。

平成20度・21年度は各1名、早稲田渋谷シンガポール校への進学が決まっている。インターネットで調べ、その事を主な材料として進路指導していたままでは、十分な説明ができなかった。ハノイ日本人学校にて進路指導業務を進めるには、今回の訪問調査は大いに役立つものであったと言える。

また、訪問したことにより相手校との繋がりができ、これまでの進学した生徒達の努力もあり平成21年度より海外受験会場としてベトナム会場を開設することができた。これまでシンガポールまで受験に行かなければならなかったことを考えると日本人学校を会場にしての受験は保護者にも受検者にとっても負担が少なく、大きな成果である。

問題点を挙げると、1つ目に、学費の高さがある。この点については保護者の所属する団体によって補助の違いがあり、判断は保護者にゆだねるしかない。

2つ目に、このような選択の幅があることを、いかにして保護者に伝えていくかと言うことである。各都道府県より派遣されてくる教員は、全国的な進路指導業務を経験したことがない。ましてや今回のレポートのような在外高等教育施設については存在すら知らないことの方が多いであろう。

問題点の2つ目を解決する手段として「進路資料室」を開設することが考えられ、平成21年度より本校において新設することが決まった。そこで平成21年度の調査・研究対象を進路資料室のあり方、実験、進路便りの発行に焦点を置き、3年間を見通した日本人学校ならではの進路指導のあり方を調査・研究・実験とした。

3. 進路資料室開設と進路便り発行

①進路資料室

平成20年度の体験ならびに研究を背景に、平成21年度より「進路資料室」を開設することになった。ねらいは以下の通りである。

・各上級学校資料の展示 ・学習資料の展示 ・各種資料複写(持ち帰り用)

常設することにより、生徒が進路学習を日常的に行えるほか、保護者が必要な資料を閲覧、コピーすることができるようになった。

前年度より進路希望調査を行い、進学予定地域並びに各上級校への資料請求を行い年度前に開設準備を進めた。2段ある本棚と移動用マガジンファイルを利用して資料を分類し、マガジンファイルを持ち出すだけで必要な地域の資料を閲覧できるように工夫した。本棚上部に最新の資料を、上段に前年度資料、下段に過去資料と年度別に分類してある。各マガジンファイルは都道府県別、公立・私立別、帰国子女情報誌、高校別過去問題集、教科別問題集、教科別参考書、進路便りバックナンバーなど、それぞれ分類を表示した。その他に、掲示板を利用して各学校の要項や案内を掲示した。

夏季休業を利用して、新たに収集した次年度用資料と掲示物を入替、2学期からは最新情報が掲示されるようにした。

問題点としては、各家庭の帰国予定地がそれぞれ違うことから、収集が必要な資料の量が膨大となり運営担当者の業務負担が大きい点。資料送付をお願いしても公立高等学

校の場合には予算の関係もあり送付をしていただけないこともあった。

成果としては、上記の目的を達成できたほか、保護者の協力が得られたことである。卒業学年の保護者からは、利用してきた受験関係学習資料や問題集、参考書などを寄贈していただけた点。一時帰国をする度に、各高校や塾の資料などを持ち帰っていただき寄贈していただけた点が上げられる。保護者とともに作り上げていった進路資料室となったのは大きな成果であった。

②進路便り

「進路便り」を発行することにより、日本人学校より保護者・生徒に向けて進路指導に関わる情報発信をすることができるようになった。

また、2年間にわたる進路指導年間計画(スケジュール)を作成した。新発行されることになった進路便りに掲載することで、保護者ならびに生徒に国内とは違ったスケジュールであること並びに情報収集など計画的に動かなければならないことを明示することができたのは成果である。

不定期に発行される進路便りであるが、ねらいは以下の通りである。

- ・各学年の進路情報の発信
- ・新着資料の掲載
- ・Q&A

配布対象は中学部のみであったが、小学部6年生からも配布の要請があり、現在は小学部6年生以上に配布されているほか、バックナンバーを進路資料室に配置し他学年の保護者も持ち帰っている。

問題点としては、初年度の掲載内容と次年度の掲載内容が重複してしまう可能性が高い点。最新情報を常にインターネットなどから入手する業務量などがあげられる。

成果としては、前述したように年間スケジュールを保護者並びに生徒が把握できること、共通した情報を保護者が共有できたこと、進路に関わる不安に対してQ&A形式で情報公開できたこと、面接の模範解答などを掲載できたことなどがあげられる。特に保護者・生徒・学校が3年間にわたる進路指導情報を共有できた点は大きな成果である。

4. おわりに

保護者の勤務形態や帰国を予定していない生徒など、日本人学校が「日本に帰国することを前提に」進路指導をしていた時代とは異なっている現状がある。在外高等教育施設の調査はそのような新たな選択肢を保護者に発信することができ成果が得られた。特に海外試験会場の設置にこぎ着けられたのは、大きな成果である。

情報不足という大きな問題点を根本的には解決することはできないが、進路資料室開設並びに進路便り発行は保護者並びに生徒の不安解消に一助した。様々な情報が交差する状況の中で、全体に共通理解を図れる進路便りの発行は、大きな成果である。

今後の課題としては、インターナショナル校への進学をめざす生徒など在外高等教育施設以外の進学先に関わる情報をいかにして集めていくのか。また、その事によって日本人学校より他校(インターナショナル校など)へ転出した生徒・保護者への支援をどこまですべきなのかなどが進路資料室運営の課題ではなかろうか。現状では日本人学校児童・生徒のみを対象としているが、今後どこまで業務を広げていくのが課題である。その中には、中学進学、大学進学も入ってくるとなると担当者の業務負担は膨大となる。

進路便りについては、初年度と言うこともあり、中学部全体並びに小学部6年生家庭に

配布を行った。最新情報を除けば、掲載内容が毎年変わるわけではなく重複する部分が多い。次年度以降の進路便りについては、それぞれの学年に合わせた進路情報の発信を学年ごとにする必要性が出てくると考える。進路指導主事1人での業務としては膨大となり、各担任に協力を仰がなければ実施は不可能となるが、派遣元の各都道府県の情報ならいざ知らず、日本全国が対象となり公立のみならず私立高等学校など赴任したばかりの教員には難しい。専門の担当者が必要である。しかしながら人員不足の日本人学校の状況を考えると担当者を増員することは難しい。

今後の課題は以上のように存在しているが、この調査・実験・研究の成果は、課題以上に大きい。今後も進路資料室運営・進路便り発行は、継続されることと考える。

以上で、私の現地教育事情等に関する調査・研究 最終報告書とする。

【おわりに】

文科省の最終報告書にも書いたが、2年間の赴任期間中、最も努力したのが進路指導である。他府県公立高校入試制度、私立校や帰国生入試、在外高等教育施設、各インター校それぞれについて、保護者にも生徒にも安心して進路決定してもらうことは難しい。中学部の生徒数は、決して多くはないが、一人ひとりが帰国する先が違うため業務は膨大なのである。

ハノイ日本人学校の場合は、時差が2時間しかないため、日本との連絡を取ることはそれほど難しくはないが、それでも朝6時には出勤しておかなければならない。授業時数も国内と比べれば多く、様々な会議が行われる為に勤務時間内には国内へ連絡を取ることができないからである。その点、E-mailの普及やWeb-siteを通じての資料収集などは助かった。

疲れを癒やす為に、ドライバーさんは元気が出る食べ物屋に連れて行ってくれた。同僚たちとはお互いを励まし合いながら、ビアホイ（ビアガーデン）に通った。気晴らしの散歩先では、ベトナムの方々と知り合い元気を分けてもらえた。ハノイには北海道人会があり、1年ぶりに食べたジンギスカンはとてつもなくうまかった。毎朝、朝食を食べさせてくれたフォー屋さんの味は飽きることがなかった。英会話講師たちとパブで騒いだのも楽しかった。

授業や授業外で、帰国してからの帰国子女としての失敗談などをするとき、子どもたちの目が真剣だったのも忘れられない。

ハノイ日本人学校での勤務は、激務であった。今までもできる限りの努力をして働いてきたと思っていたが、それ以上の能力を発揮しなければならなかった。無事に、勤務できたのには、同僚たち、保護者のみなさん、各高校の入試担当の方々、借り上げていた車のドライバーさん、ハノイで知り合った日本人・ベトナム人・その他の国の方々の助けがあったればこそである。中でも、帰国子女仲間だと先輩先生と呼んでくれた生徒たちと教員を辞職してまでついて来てくれた相方には深く感謝している。

